



# 僕らが明日に残せるもの

## 中山弘さん 荻窪音楽祭実行委員長

プロフィール：東京都杉並区生まれ。

立教大学理学部を卒業後、2年間大阪の塗料専門会社に勤務。その後、父・中山勇さんの跡を継ぐことを決意し、現在に至る。「21世紀の荻窪を考える会」メンバー。杉並区商店連合会常任理事どっとコム委員会担当。

テーラー中山ホームページ：<http://www.tailor-nakayama.com/>

荻窪教会通り商店街：<http://www.kyokai-dori.com/>

荻窪音楽祭公式サイト：<http://www.ongakusai.com/>

杉並区商店連合会公式サイト：<http://sugishoren.com/>

### ■地域の安全・安心を担う商店街へ



▲仕立用生地が多数並ぶ店内

「テーラー中山では、毎日23時まで看板とウィンドウの灯りをつけています。夜、荻窪駅から教会通り商店街を歩いていても、うちの灯りを目指せば、怖くないという道にしたい」

中山さんは、20年以上も前から商店街は買い物をするだけの場所ではなく、地域の安心と安全を担うところだと主張してきた。たとえ売れなかつたとしても、土日を含め、シャッターを開けて営業し続けること。地道な努力ながらも、そういった行動が住民の信頼を得て、ゆくゆくは地域の活性化につながる。

「心配しているのは、5～10年先の商店街の行方です。おそらく後継者がいない店舗はシャッターを降ろしてしまうでしょう。空き店舗だらけのシャッター通りになってしまったら防犯上良くないし、街自体が死んでしまいます」

もちろん、ただ手をこまぬいているわけではない。荻窪教会通り商店街の公式サイトを見ればわかるが、加盟店舗をわかりやすく紹介する「教会通り案内図」は秀逸。商店街の若い跡取りやおかみさんと一緒に、ひとつひとつ手作りで作成している。

「彼らのような若い世代を育てていくのも、僕の仕事だと思っています」

そう話す中山さんは、大学時代、テーラー

とはまったく無縁の化学を専攻。父・勇さんの教育方針が、「自分の好きな勉強をしなさい」だったのだ。父の跡を継ぐ気は皆無で、大学を卒業後は、大阪の塗料専門会社に勤める。好きな実験を存分に行なえる環境で、上司にも恵まれ、やりがいのある仕事だった。大阪弁も覚え、その地に骨を埋めようとすら思うほどだったという。

その思いが変化したのは、1980(昭和五五)年、秋。父・勇さんが、テーラー業界最高峰といわれる高松宮技術奨励賜杯と内閣総理大臣賞の両賞を同時に受賞したときである。

「やっぱり僕が、跡を継がないとまずいよなと思いました」

就職した会社での仕事は楽しかったが、その揺らぐ思いは時が経つほどに大きくなっていく。就職して2年後、父・勇さんに「跡を継ぎたい」と頭を下げる。だが、返ってきた答えはノーだった。

「たぶん、父を喜ばせてやろうという気持ちが伝わったんでしょうね。早く大阪に帰って、しっかりサラリーマンをしろと言われました」

その半年後、もう一度頭を下げ、やっと勇さんの了解を得る。嫌になったわけではない会社を辞めるのは心労も多かったが、「自分なりに決めた道」を歩むべく、中山さんは再び生まれ育った地に根をおろすこととなった。

### ■着る人の活躍を応援する服づくり



▲バリエーション豊富にネクタイも並ぶ

先代の勇さんの時代は、高度成長期。スーツは、既製品も少なく、サイズも一定のものしかない。ほとんどの人は、あるものを我慢して着ていた。オーダースーツは、初任給と同等以上の金額であったが、需要も多かったという。

「たしかにモノを並べれば売れる時代もあったでしょう。たとえば、八百屋さんであれば市場から仕入れてきて、そのままリンゴやみかんを店頭で並べれば良かったんです。でも、今だったらダンボール1箱のみかんを買う人は少ない。だったら、1週間分のバラエティに富んだ果物を小分けして入れてみよう。産直の商品を仕入れて、顔がみえるものを売っていき。努力されています。個人のお店が大型店と差別化しつつ、どうやって生き残っていくかは、八百屋さんであろうと洋服店であろうと同じことです」

昨今は、安価でサイズやデザインも幅広く揃っているスーツの量販店がたくさん存在する。ただ、オーダースーツだけ見れば、5万のものもあれば、20～30万のものもあり、物価としては以前とほとんど変化していない。

「待っていれば、勝手にお客さまが訪れるご時世ではありません。なげうちを選んで来

、

てくださるのか。だいたいのお客さまは近くて便利だからという理由が大きな要素だと思っています。一定の納期までに、自分がつくれる着数の限界もありますし、それだけのお客さまは、荻窪という土地だけでも十分につかめるだろうと考えています」

スーツの価格の違いには、理由がある。10万であれ、20万であれ、完全な対価として自信を持ってお渡しすることができるかと中山さんは言う。

「うちの服を着て、お客さまが活躍すること。ふと気づいたときに“あ、中山の服だったんだ”と思っていただけたら、ほんとに嬉しい。僕の仕事は応援者でしかありません。もし、荻窪じゃなくて違う街で営業するとしても、同じようにお客さまがスーツで活躍するシチュエーションを考えて、服づくりをしていくと思います」

父の跡を継ぐこと——技術は受け継いでも、同じ事やっけては仕方がない。自分は、どういう風に異なる服づくりや商売が出来るのだろうか。中山さんはいまも模索を続けている。

## ■僕らが明日に残せるもの

中山さんがテーラーの仕事同様に力を使っているのが、「荻窪音楽祭」だ。この音楽祭は、荻窪駅前の整備や荻窪を取り巻く環境問題を考え、住民たちがよりよいまちづくりを提言していく団体「21世紀の荻窪を考える会」が母体となっている。2000(平成十二)年から始まり、今回で13回目。新杉並公会堂のプレオープン記念として2006年5月19日(金)ー21日(日)の間で開催された。なぜ荻窪でクラシック音楽なのかといえば、会長である宇田川紀通さんをはじめ、住人にクラシック音楽の愛好家やプロの演奏家が多いことが理由だという。今回の音楽監督である國分誠さんも荻窪在住のアーティストだ。

「荻窪音楽祭の目的は、クラシック音楽を通じた街の活性化。毎年2回春と秋に行なっています。それとともに、「21世紀の荻窪を考える会」が提言している、荻窪駅の南北を乳母車や自転車でスムーズに行き来できるバリアフリー化について、できれば賛同してもらえると嬉しい。この提言は、私たちが生きている間、ここ30年以内に実現するのは難しいか

もしれませんが、それだけに純粹に荻窪という街のために行なっている活動だと思っています」

彼の手首に、今回仲間作りのためにつくったブルーのミュージックバンドが目立つ。

中山さんは、40代の間に依頼された仕事は、自分を拓げるために断らないという方針を立て、荻窪音楽祭以外にも、さまざまな取り組みを行なう。「むさしのぞうさんタウン」では『テーラー中山の「ご主人のおしゃれ!!」』の執筆、保健センターからの依頼では、リタイアした人生の先輩たちに向け、「健康的にイキイキと生きる」というテーマで、粋なオヤジになるための提案をしている。

人とのつながりを大切にする中山さん。やって欲しいと頼まれることもたくさんあり、多忙な日々を送っているが、すべてを通してもっとも楽しみにしているのは、子どもたちの成長だという。

「娘が2人いるんですが、どんなところでも自信を持って出せる子どもたちです。あとは楽しみといえば、自分の将来ですね。自分の度胸が表れます。もちろん、僕がやっている商売の方向はあっていると信じていますが」

服づくりにせよ、さまざまな活動にせよ、懸命に取り組んではいるが、人と人とのつながりの中で生まれる副産物に過ぎない。また、一番身近な人たちを幸せに出来ないようでは、大きな輪もつけれないだろう。家族はもちろんのこと、荻窪を愛し、そこで生活する人たちを尊ぶ中山さん。土地に根ざして生きる豊かさが、やわらかな面持ちにも表れていた。

(文：佐竹未希)



▲2006年荻窪音楽祭ポスター